

30-1067

米国薬学部における医薬品情報学教育の実際

○大津 史子¹, 矢野 玲子¹, Besinque Kathleen² (¹名城大薬,²南カリフォルニア大学)

【目的】

現代医療で推進されている根拠に基づく医療を実践し、薬剤師としての職能を発揮するには、医薬品情報の処理能力（収集、評価、適応）が必須である。これらの能力は、講義形式の教育のみで身につけることは難しく、現在は卒後の各人の自己学習に頼っていると言える。薬学教育6年制が正式に決定し、新たなカリキュラムの作成が行われている現状をふまえ、薬学教育6年制の先進国である米国薬学部における医薬品情報学教育の実際に関するアンケート調査を行ったので報告する。

【方法】

対象は、米国の薬学部に90校である。予め、各大学のホームページより、公開されているカリキュラムを調査し、医薬品情報関連の科目を抽出した。各大学のClinical Practice科目の責任者に、個々の大学で開講している科目に関するオンラインによるアンケート調査を実施した。アンケート内容は、科目の授業形態、教育体制、教育内容、教材、DIセンターの有無など30項目である。

【結果・考察】

アンケート回収率は約50%であった。約7割が必須科目として医薬品情報学関連科目を開講していた。そのうち、7割は医薬品情報単独科目、3割は統合型の科目となっていた。DIセンターは、多くの大学で保有しており、DIセンターを利用した医薬品情報のみにターゲットを絞ったクラークシップ（臨床実習）も行われていた。